

# Eureka V

六年制通信 No.35 平成30年2月23日(金)号

## 表現力

高等学校の新学習指導要領の案が新聞紙上に掲載されました。皆さんの中にも読んだ人がいるでしょうね。案となっていますが、おそらくそのまま進むだろうと言われています。この春から小6になる児童からの全面改訂ですから、自分たちは関係ないと思っているかもしれませんが、大学入試には先行して影響を与えるでしょうから、皆さんも無関心ではられませんね。カリキュラム表も載っていましたが、国語の「言語文化」「論理国語」、社会の「公共」、英語の「論理表現」といった耳慣れない科目に興味を持つ人もいるかもしれません。当然ながら、教科書もずいぶん変わると言われています。君たちに弟さんや妹さんがいるのなら、いつか比較してみると面白いと思いますよ。そういえば「変わりゆく授業」とか「大学入試が変わる」のようなタイトルを、最近よくテレビの特集番組で見るとなりましたが、まだまだ議論は続くといった感じですね。

また、文科省は学力の三要素を示しています。

- ① 知識・技能
- ② 思考力・判断力・表現力
- ③ 主体的・対話的で深い学び

大学入試は学力試験ですから、これらの「学力」を測定するということになりますね。どれほど知識があるか。思考力が優れているか。深い学びがなされてきたか。さて、どうやって、これらを測定するのでしょうか。現行の入試問題では何が測定でき、何が測定できないのでしょうか。知識を問う問題だけでは不十分で、思考力を問わなくてはいけない、という話は、もう何十年も議論されてきていますが、現行の入試問題では、そんなに思考力や判断力は測れないのでしょうか。

三要素のうち、知識、思考力、判断力は別にフェルミ推定のような問題を持ち出さなくても、従来の入試問題で測定できると私は思います。しかし、表現力を測るとするのは極めて難しいのではないかと考えています。例によって『明解国語辞典』によれば、表現とは「内面的・主観的なものを外面的・感性的にとらえられる手段・形式によって伝達しようとする」とし、「表情・身ぶりのほか、記号・言語・音楽・絵画・造型などの方法が有る」ということです。これ、どうやって測定しますか。測定するということは点数をつけるということです。表情に点数をつけるのですか。入試で測るということは、順位をつけるということです。身ぶりに順位をつけるのですかね。難しいことだと思いませんか。フィギュアスケートの「芸術点」みたいなもので

すかね、といった人がいましたが、それはさすがにどうかと思います。

一つ考えられるのは、実は従来の試験は全て減点方式なのですが、表現力をみる場合は加点方式になるのではないかということです。減点方式は、満点を設定しておいて間違ったら減点していくやり方です。当たり前だと思うかもしれませんが、これは例えば、英作文でいえば、配点5点の問題で、どれほどすぐれた英作文であっても5点しかないということです。先日三重中フェスタでも話したのですが、「水は零度でどうなるか」という問いで、正解を「氷になる」、配点を2点と設定すると、「固体になる」と答えようが「液体と固体の両方の状態で存在できる」と書こうが2点でしょう。でも明らかにこれらの解答には差があります。減点方式では、そこが測定できません。しかし、加点方式にすれば、この問題は解消される…はずです。まして、有名な問題ですが、「氷が溶けると（ ）になる」に、普通は「水」と答えるのかもしれませんが、「春」と書いてきた子を「表現力」という点から評価したら、一概に×とも言いにくいですね。減点方式なら確実に×でしょうが、私なら「春」と書いた子に会いたくなるわ。

「主体的・対話的で深い学び」は学び方を言っているのもあって、測定するものではないのかもしれませんが。いわゆるアクティブラーニングです。そういえば、これを推奨している大学の先生の講演を聴いたのですが、ご自分の授業で学生に課題を出して、その場でスマホで検索をさせてスピーディーに授業を進めていると自慢されていました。何たる浅薄な授業かと、私は暗澹たる気持ちになりましたがね。それはともかく、どれほど主体的に学習をしてきたか、いわば「学びの履歴」のようなものを残しておこう、それを例えば推薦入試などに活用しようという考え方はあります。ポートフォリオ、あるいはe-ポートフォリオというのがそれです。またいずれ詳しく紹介しましょう。さて、学力の三要素について大急ぎで見えてきましたが、このうち思考力と判断力はとても大切です。しかし、その基礎となる知識はもっと大切だということを忘れてはいけませんよ。それに知識の基礎は語彙です。豊かな語彙ですよ。

### 今週のおすすめ

・山村 修 『遅読のすすめ』 (ちくま文庫)

立花隆を筆頭に速読や多読を誇る評論家や書評家に対し、彼らの主張と相容れない自分の感性を素直につづった本です。冷静に、しかし大いに反論している。私には大変面白い一冊でした。私は古本屋さんで、帯の文句につられて、新潮社の単行本を買いました。紹介します。

「目が文字を追っていくと、それにともないながら、その情景があらわれてくる。目のはたらき、理解のはたらきがそろっている。そのときはおそらく、呼吸も、心拍も。うまくはたらき合っている。それが読むということだ。読むリズムが快くさまれているとき、それは読み手の心身のリズムと幸福に呼応しあっている。読書とは、本と心身とのアンサンブルなのだ」

いかがですか。この帯の文章自体を遅読して味わいたいものですね。

BGMは映画『ストリート・オブ・ファイヤー』より *Tonight is what it means to be young* でした…。